

# 桃の文化的表象

—日中比較の視点から—

雨宮久美

Kumi AMEMIYA. Cultural Representation of Peach. *Studies in International Relations* Vol.37, No.2. February 2017. pp.71-80.

The beauty of peach flowers has attracted people from ancient times. Peaches as a theme have also been composed by various poets and authors finding prominence since *Shi-jing* (詩経) in China. Several folklores found in the peach mark and the peach seasonal festival are discussed. Contrasts between Japan and China of the peaches cultural meaning and symbology as handled in various literal texts are explained.

The exorcising power (辟邪) and the auspicious (吉祥) life force in this symbolic fruit, as understood in Chinese cultural heritage are further discussed.

## はじめに

三月から四月にかけ、日本各地で美しい桜が開花し、淡いピンク色の景色に視覚が癒される。そのあとを追うように桜よりも濃い色彩の桃の花が開花する。桃の花の美しさに、日本人は古来より引き付けられてきた。「樹下美人」図の世界のような美しい情景を詠んだ大伴家持の歌が『万葉集』にある。

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

桃の花紅色ににほひたる面わのうちに青柳の細き眉根を笑み曲がり…… (長歌)<sup>1</sup>

桃は、中国でも『詩経』以来さまざまな詩文に詠まれている。春節に飾る桃符や桃の節句に関わる諸伝承など、日中ともに話題が豊富である。本稿では、桃という花木に関わって日中の伝承や文学の比較検証をとおして、桃の文化的表象を明らかにすることを目的にする。

縄文前期の日本に渡来した桃は、時代とともに広く各地で栽培されるようになった。桃は有用な栽培植物として古くから日本人の生活と深く結びついていた。『古事記』上巻には伊邪那岐命が桃の

実で黄泉醜女を追い払った神話が記されている<sup>2</sup>。中国から伝わった桃の霊力の思想も日本人の生活に影響を与えている。

桃は、中国原産のバラ科モモ属であり果実を実らす落葉木である。『詩経<sup>3</sup>』に詠まれている桃について、加藤喜光は「中国原産。高さは約三メートル。春、葉が生じる前に花が咲く。花は淡紅色で美しい。花実には毛がある種と、ない種とがある。非常に古くから栽培されていて、品種が多い。『詩経』ではエロチック・シンボルとして召南・何彼禮矣 [24], 衛風・木瓜 [64], 魏風・園有桃 [109] でも用いられている<sup>4</sup>」と、記している。先秦時代の中国では、桃は、生殖や生命力の象徴であったのである。

## 一、日中の桃の形象

『詩経』の桃は、子孫繁栄を予祝し男女の愛情を表現するものとして詠まれている。美しい娘の象徴として桃の形象を用いた「周南」を以下に挙げる。

桃之夭夭。有蕢其實。  
之子于歸。宜其家室。  
桃之夭夭。灼灼其華。

之子于歸。宜其家室。  
桃之夭夭。其葉蓁蓁。  
之子于歸。宜其家人<sup>5</sup>。

この詩は、三つに分かれており桃の花・実・葉を歌っている。結婚の祝頌歌であり、嫁ぎゆく乙女の幸福を祈る歌である。桃を嫁入りの若い美しい少女と比喩している詩歌である。桃は、少女の美を象徴しており、とても華やかで燃えるようなエネルギーな健康的な様子を想像することができる。さらに、嫁ぐ少女にとって安産、多産を祈念する為に桃の呪性が信じられていたことを窺わせる。古代の女性にとっての幸せは、嫁いで多くの子どもを出産することにあった。桃は、妊娠中毒症に効果のある実とも考えられていた。また、女性から男性への贈り物は、必ず果実と決まっていた。つまり、桃という果実には、深い求愛の意味が込められていた。

明代の李時珍によって著された中国本草学の最大の成果である『本草綱目』第二十九卷「果部・桃」には、以下のように記されている。

桃【集解】〔別録〕桃生太山川谷。(中略)〔時珍曰〕桃品甚多，易于栽種，且早結実。(中略)其实有紅桃，緋桃，碧桃，細桃，白桃，烏桃，金桃，銀桃，胭脂桃，皆以色名者也。有綿桃，油桃，御桃，方桃，匾桃，偏核桃，皆以形名者也。有五月早桃，十月冬桃，秋桃，霜桃，皆以時名者也。……実〔気味〕辛，酸，甘，熱，微毒。多食令人有熱。〔主治〕作脯食，益顔色。肺之果，肺病宜食之<sup>6</sup>。

桃について、九つの色彩、六種類の形態が記されている。『本草綱目』では、桃は実・核仁・花・葉・莖、それぞれに薬効を認めている。現在では、三千以上もの桃の品種があり、野生系の三センチほどの小型な果実から品種改良され大きくなった。

中国古代に桃は辟邪の植物として尊重された。後漢代の文人である王充（建武三（23）年～永元年間（89～104）年）の著した『論衡』に、『山海経』が引かれている。鬼についての当時の俗論を正す「訂鬼」篇に引かれた一文は次の通りである。

「山海経又曰：「滄海之中，有度朔之山，亂龍篇：「滄海」作「東海」。按：史記五帝紀集解，後漢書禮儀志注，通志禮略三引山海経並作「東海」。文選東京賦舊注，國策齊策三高注，齊民要術十引漢舊儀同。則作「東海」者是。戴埴鼠璞引山海経作「滄海」，乃轉引此文也。上有大桃木，其屈蟠三千里，其枝間東北曰鬼門，(中略)考古有天門，地戶，鬼門，人門之說。周禮大司徒疏引河圖括地象曰：「天不足西北，地不足東南，西北爲天門，東南爲地戶，天門無上，地戶無下。」易乾鑿度曰：「乾爲天門，巽爲地戶。」後漢書郎顛傳，(中略)吳越春秋句踐歸國外傳曰：「西北立龍飛翼之樓，以象天門；東南伏漏石竇，以象地戶。」隋書王劭傳：「時有人於黃泉泉浴，得二白石，頗有文理。遂附致其文以爲字，而上奏曰：其大玉有『天門地戶人門鬼門閉』九字。」蕭吉傳：「良地鬼門，西南人門。黃帝宅經（此乃六朝以後偽撰之書。）云：乾位曰天門，巽位曰地戶，坤位曰人門，艮位曰鬼門。」是古以西北爲天門，東南爲地戶，西南爲人門，東北爲鬼門。山海経已有東北曰鬼門之語，則其說不自緯書始矣。暉按：孫氏所引諸說，並非此文鬼門之義也。說見下。萬鬼所出入也。上有二神人，一曰神荼，一曰鬱壘，主閱領萬鬼。惡害之鬼，執以葦索，而以食虎。於是黃帝乃作禮以時驅之，路史後紀五注引莊子云：「游島問於雄黃曰：逐疫出魅，擊鼓噪呼，何也？曰：黔首多疾，黃帝氏立巫咸，使之沐浴齋戒，以通九竅，鳴鼓振鐸，以動其心，勞其形，趨步以發陰陽之氣，飲酒茹蔥，以通五藏，擊鼓噪呼，逐疫出魅，黔首不知，以爲魅崇耳。」立大桃人，門戶畫神荼，鬱壘與虎，懸葦索以禦。」(中略)山海外経曰：「東海中有山焉，名度索。上有大桃樹，屈蟠三千里。東北有門，名曰鬼門，萬鬼所聚也。天帝使神人守之，一名神荼，一名鬱壘，主閱領萬鬼。若害人之鬼，以葦索縛之，射以桃弧，投虎食也。」劉昭續禮儀志注云：「山海経曰：東海中有度朔山，上有大桃樹，蟠屈三千里，其卑枝門曰東北鬼門，(按此句有誤。)萬鬼出入也。上有二神人，一曰神荼，一曰鬱壘，主閱領眾鬼之惡害人者。執以葦索，而用食虎。於是黃帝法而象之，毆除畢，因立桃梗於門。戶上畫鬱備持葦索，以御凶鬼。畫虎於門，當食鬼也。」(中略)凶魅(中略)有形，故執以食虎。案可食之物，無空虛者。其物也，性與人殊，時見時匿，與龍不常見，無以異也<sup>7</sup>。

度朔山上の大きな桃の木が三千里にわたってわかまわって、その枝の間の東北を鬼門といい、多くの鬼の出入り口になっている。山上には神荼と鬱壘の二人の神人がいて害悪する鬼を縛り上げて虎の餌食にするという。そのことから桃のふだに神荼と鬱壘と虎を描いて凶悪な魅を防いだと桃符の由来を説明しているのである。鬼は人の思念から生ずるとして王充はその存在を否定しているが、一方でその実在を認める考えも根強かったことが分かる。

賈思勰『齊民要術』には、「東方種桃九根宜子孫除凶禍<sup>8</sup>」とあり、辟邪の植物として人宅に植えられていたことが分かる。寺島良安『和漢三才図絵』にもこれとほぼ同様の記述がある。

桃乃西方之木五行之精仙木也故能厭伏邪氣制百鬼今人門上桃符以之又釘於地上以鎮家宅謂之桃擲<sup>9</sup>

次に桃を呪術的な機能のあるものと信じられていたことから生れた日中の習俗をみると、魏晉六朝時代（222～589年）に、桃は長生の仙果として登場している。『漢武故事』、『漢部帝内伝』などには、西王母が漢の宮廷を訪れたときに、三千年に一度だけ身を結ぶ桃の実を武帝に与えて、食べさせたと記されている。

王母遣使謂帝曰：「七月七日，我當暫來。」（中略）是夜漏七刻，空中無雲，隱如雷聲，竟天紫色。有頃，王母至。乘紫車，玉女夾馭，載七勝，履玄瓊鳳文之鳥，青氣如雲，有青鳥如鳥，夾侍母旁。下車，上迎拜，延母坐，請不死之藥。母曰：「太上之藥，有中華紫密，雲山朱蜜，玉津金漿；其次藥有五雲之漿，風實雲子，玄霜絳雪，上握蘭園之金精，下摘圓丘之紫漿；帝滯情不遣，慾心尚多，不死之藥，未可致也。」因出桃七枚，母自啖二枚，與帝五枚。帝留核着前，王母問曰：「用此何爲？」上曰：「此桃美，欲種之。」母笑曰：「此桃三千年著子，非下土所植也。留至五更，談語世事，而不敢言鬼神，肅然便去。東方朔竊從朱鳥牖中窺母，母顧之謂帝曰：「此兒好罪過，疏妄無

賴，久被斥退，不得還天；然原心無惡，尋當得還，帝善遇之。」母既去，上惆悵良久。『漢武故事<sup>10</sup>』

この逸話から三月三日を「桃花節」とし、西王母の誕生日を祝う祭「蟠桃会」の行事が定着することになった。日本でも西王母の仙桃が古くより馴染まれていたことは、後述の『かげろふ日記』の和歌や「三千年に花咲き實なる桃花」を主題にした能の『西王母』を例に挙げることができる。西王母が桃の品種名でもあったことは、伊藤伊兵衛『花壇地錦抄<sup>11</sup>』などから分かる。

西王母 ももいろ，八重，大りん，木一尺ほどなれば花咲く事おびただし。桃は一所に二ずつなる物なり。花落つるまで葉出す，六，七月時分，葉のさきに又花咲く事あり<sup>12</sup>。

伊藤伊兵衛が記す二一の桃の品種の最初に挙げられているのが西王母で、八重の美しい大輪の品種であった。

これまで検討してきたとおり、中国では桃が辟邪の植物として尊重されてきた。また、王劭『風俗通義』巻八「桃梗 葦菱 畫虎」には、

謹按：黄帝書：「上古之時，有荼與鬱壘昆弟二人，性能執鬼，度朔山上立桃樹下，簡閱百鬼，無道理，妄爲人禍害，荼與鬱壘縛以葦索，執以食虎。」於是縣官常以臘除夕，飾桃人，垂葦菱，畫虎於門，皆追效於前事，冀以衛凶也。桃梗，梗者，更也，歲終更始受介祉也<sup>13</sup>」。

と、大晦日には桃梗（桃を人の形に彫ったもの）を門に立てて百鬼を追い払った習慣があったことが記されている。宗懔『荆楚歲時記』「正月」に桃梗と同じ辟邪の機能を持った桃符について次のように伝承を載せる。

帖畫雞，或斲鏤五采及土雞于戶上。造桃板著戶，謂之仙木。繪之神貼戶左右，左神荼，右鬱壘，俗謂之門神。按莊周云：「有掛雞于戶，懸葦索於其上，插桃符於旁，百鬼畏之。」又魏

時人問議郎董勛云：「今正臘旦，門前作煙火，桃神，絞索，松柏，殺雞著門戶逐疫，禮歟？勛答曰：「禮，十二月索室逐疫釁門戶，磔雞，燻火行，故作助行氣。桃鬼所惡，畫作人首，可以有所收縛。不死之祥。」又桃者五行之精，能制百怪，謂之仙。括地圖曰：「桃都山有大桃樹，盤屈三千里，上有金雞，照則鳴，下有二神，一名鬱，一名壘，并執葦索，以伺不祥之鬼，得則殺之，即無神荼之名。」應劭風俗通曰：「黃帝書稱，上古之時，有神荼，壘鬱兄弟二人，住度朔山下桃樹下，簡百鬼，鬼妄搢人，援以葦索，執以食虎。于是縣官以臘除夕飾桃人，垂葦索，畫于門，效前事也<sup>14</sup>。」

桃は五行の精で百怪をよく制する仙木だと説かれている。陽の代表である桃は陰の鬼を避ける力があると信じられたのである。民俗学者の永尾龍造は、桃梗が桃符に変化して、後に意匠化して桃板になり、めでたい意匠図が描かれるようになって、さらに春聯と門神に変化していったと説いている<sup>15</sup>。

辟邪の力をもつ桃で作った弓である桃弧についての蔡邕『独断』の記載も挙げておく。

疫神。帝顓頊有三子。生而亡去爲鬼。其一者居江水。是爲瘟鬼。其一者居若水。是爲魍魎。其一者居人宮室樞隅處。善驚小兒。于是命方相氏黃金四目。蒙以熊皮玄衣朱裳。執戈揚楯。常以歲竟十二月。從百隸及童兒而時儺。以索宮中驅疫鬼也。桃弧棘矢土鼓鼓且射之以赤丸。五穀播酒之以除疾殃。已而立桃人葦索儺牙虎神荼鬱壘以執之。儺牙虎神荼鬱壘二神。海中有度朔之山。上有桃木蟠屈三千里。卑枝東北有鬼門。萬鬼所出入也。神荼與鬱壘二神居其門。主閱領諸鬼。其惡害之鬼執以葦索食虎。故十二月歲竟常以先臘之夜逐除之也。乃畫荼壘。並懸葦索於門戶。以禦凶也<sup>16</sup>。

『文選<sup>17</sup>』卷第三「東京賦」にも年の暮れの追儺の儀式で神主やみこたちが桃の弓に棘の矢をつがえて盛んに射かけ、悪鬼を追い払う描写がある。

桃弧棘矢，所發無臬。飛礫雨散，剛痺寔必斃。桃弧，謂弓也。棘，矢箭也。痺，難也。言鬼之剛而難者皆盡死也。善曰：漢舊儀，常以正歲十二月，命時儺，以桃弧葦矢且射之，赤丸五穀播酒之，以除疾殃。左氏傳曰：桃弧棘矢，以除其災<sup>18</sup>。

『古事記<sup>19</sup>』に伊邪那岐命が桃を投げて黄泉醜女を追い払った場面があることは前述した。辟邪のための桃符は、現在中国では春聯として形を変えて伝えられている。桃に辟邪の機能がおり、吉祥の象徴でもあったことは確認できたと思う。

## 二、中国古代の上巳節

三月三日は日本では桃の節句や雛祭りとして親しまれているが、『羅山文集』巻七十に、

桃花節用季春上巳日蓋古人此日赴東流水畔禊祓不詳見後漢志且曲水事晋東晉說武帝以周公營洛羽觴隨波此爲權輿自魏以後用三月三日不拘巳日月令廣義謂上巳十幹之巳也非辰巳之巳蓋二月晦日當於巳午則三月上旬不有巳日故知十幹之而已而不爲十二支之巳雖然至今推三日爲巳節者，國俗襲因循之習也<sup>20</sup>。

とあるように、中国の上巳の行事がその源となる。本節では、日本の三月三日の諸行事が中国からの影響を受けながらも、日本独自の年中行事としてどのように定着していったかを考察する。

先ず古代中国における三月三日の行事の形成を概観していく。漢代、三月最初の巳の日に水辺で祓禊をしていたことは、『後漢書』「礼儀志上」に、

是月上巳，官民皆絜於東流水上曰洗濯祓除，去宿垢・疾爲大絜。絜者，言陽氣布暢，萬物訖出，始絜之矣<sup>21</sup>。

とあるとおりである。東流する河のほとりで垢や熱病を取り除いて禊をしたことが記されている。『後漢書』劉昭の注に引く『韓詩章句』にも、「鄭國之俗，三月上巳，之溱・洧兩水之上，招魂續魄，秉蘭草，祓除不祥。」とあり、鄭国の風俗として、

三月上巳に溱水・洧水のほとりで、不祥を除くために祓を行っていたことを伝えている。上巳の日に行われていた祓禊は、『宋書』「礼志二」に、「蔡邕章句曰：「陽氣和暖，鮪魚時至，將取以薦寢廟，故因是乘舟禊於名川也。論語，暮春浴乎沂。自上及下，古有此禮。今三月上巳，祓於水濱，蓋出此也。」（中略）自魏以後但用三日，不以巳也<sup>22</sup>」とあるように、魏・晋以降には上巳の日ではなく、三日の日に固定されていった。

水辺での行事ということから、流水に杯を浮かべる曲水の宴が魏晋の頃から発展していった。曲水の宴がもともとは祓禊と関わることは、王羲之の「蘭亭序」に「永和九年，歲在癸丑。暮春之初，會于會稽山陰之蘭亭，修禊事也。群賢畢至，少長咸集。此地有崇山峻嶺，茂林修竹；又有清流激湍，映帶左右，引以為流觴曲水，列坐其次。雖無絲竹管弦之盛，一觴一詠，亦足以暢叙幽<sup>23</sup>」とあることから分かる。

『晋書』「東晉傳」には、曲水の宴がどのように始まったか、摯虞<sup>24</sup>と東晉<sup>25</sup>の二通りの説を載せている。

武帝嘗問摯虞三日曲水之義，虞對曰：「漢章帝時，平原徐肇以三月初生三女，至三日俱亡，邨人以爲怪，乃招攜之水濱洗祓，遂因水以流觴，其義起此。」帝曰：「必如所談，便非好事。」

晉進曰：「虞小生，不足以知，臣請言之。昔周公成洛邑，因流水以汎酒，故逸詩云『羽觴隨波』。又秦昭王以三日置酒河曲，見金人奉水心之劍，曰：『令君制有西夏。』乃霸諸侯，因此立爲曲水。二漢相緣，皆爲盛集。」帝大悅，賜晉金五十斤<sup>26</sup>。

晋の武帝の質問に対して、摯虞は、三月初日に生まれた徐肇の三人の娘が生まれて三日でみな死んでしまったので、これを怪しんだ村人たちが水辺で禊をし、觴を浮かべたことが曲水の宴の始まりだと答えている。それに対して東晉は、先ず都を定めた周公が、流れに觴を浮かべたことを説いて、「羽觴隨波」の詩句はこれを詠んだものだとする。『文選』第二十卷の顔延年「應詔讌曲水作詩」の「伊思鑄飲，每惟洛宴。」の詩句に付された李善

注によれば、「東陽無疑齊諧記，東晉對武帝曰：昔周公卜洛邑，因流水以汎酒，故逸詩曰：羽觴隨流波<sup>27</sup>」と、『齊諧記』が出典になっている。

永仁（1293～99）年前後に作られた『年中行事秘抄』の「曲水宴事」には、『後漢書』「礼儀志」などを引くとともに、異伝の一つとして「武王平殷之亂。周公於洛邑建王城。作曲水之宴。令和天下<sup>28</sup>」が、載せられている。東晉が挙げているもう一つの説は、秦の昭王が三月三日に河曲で宴をしていたとき、金人が現われ、おまえに西の地を制有させようといったが、果たして秦が覇者とり、そこで曲水の碑が建てられたというものである。いずれも天下の平定に関わる話で、摯虞の話に興であった武帝を喜ばせたという東晉の機転ぶりが話の主になっている。

摯虞、東晉の二人の話はともに三日の日を前提にしたもので、前述したように上巳節が三日の日に定まってからの時代が背景となっている。摯虞の話とほぼ同内容の話が、『荆楚歲時記』の杜公瞻注に、『続齊諧記』からの引用として載せられている。曲水の宴の起源譚が、女兒に関わるものであったことに注意をしておきたい。

### 三、曲水の宴の日本での受容

曲水の宴は唐代以降に廃れていくが、日本では奈良時代に伝えられてから今日にまで伝えられている。『続日本紀』には、曲水の宴の記事が散見するが、聖武天皇の神龜五年三月三日条に、

三月己亥，天皇御鳥池塘，宴五位已上。賜祿有差。又召文人，令賦曲水之詩<sup>29</sup>。

とあり、この頃から曲水の宴が宮中行事として整えられていったものと考えられる（顕宗天皇元年の三月上巳に曲水の宴が行われたことが『日本書紀』に記されているが、実際に行われたものか不詳である。日本古典文学全集本は「泰平の世になったことを示す書紀編者の述作<sup>30</sup>」と注している）。

南朝の梁代の年中行事を記した『荆楚歲時記』にも、「三月三日，四民並出江渚池沼間，臨清流爲流杯曲水之飲<sup>31</sup>」と曲水の宴のことを記し、前述

した『韓詩章句』も引かれており、「按：韓詩云：「唯溱與洧，方洹洹兮。唯士與女，方秉澗蘭兮。注謂今三月桃花水下，以招魂續魄，以除歲穢。」（『玉燭宝典』に引く『韓詩章句』には「三月桃花下水之時」の本文に作る）とある。

上巳節は桃の季節なので、「桃花水」という言葉も生まれている。『漢書』「溝洫志」の「來春桃華水盛，必羨溢，有填淤反壤之害。」の一節に付された顔師古の注には、「月令『仲春之月，始雨水，桃始華』，蓋桃方華時，既有雨水，川谷冰泮，衆流猥集，波瀾盛長，故謂之桃花水耳<sup>32</sup>。」とあり，春先の増水を「桃花水」と言っている。杜甫の「南征」にも「春岸桃花水，雲帆楓樹林。儉生長避地，適遠更霑襟。老病南征日，君恩北望心。百年歌自苦，未見有知音<sup>33</sup>。」と、「桃花水」の語が見える。桃花の盛りの水のほとりという意味で桃花濤という言葉も使われている。上巳の祓禊や曲水の宴が桃花という言葉と結びついていたことをここでは確認した。

曲水の宴が奈良時代に儀式として整えられていったことは前述した。平安時代になると，三月三日の行事は曲水の宴が中心になる。源高明の著した儀式書『西宮記』には，天皇が清涼殿に出御，王卿が参上，文台に紙筆を置き，勅の献題があり，公卿座，博士座，文人座にそれぞれ題が渡され，三献の後，これを読み上げる。上卿が御製を賜わり，講師が代読するという儀式の次第が記されている<sup>34</sup>。

曲水の宴は宮中ばかりでなく，貴族の私邸でも行われたことは，藤原道長の『御堂関白日記』寛弘四（1007）年三月三日条からも確かめられる。

三日，康子，有曲水會，東渡，所板院東西立草墊・硯臺等，東對南廂上達部・殿上人座，南於下廊文人座，辰時許大雨下，水邊撒座，其後風雨烈，廊下座雨入，仍對内儲座間，上達部被來，就座，新中納言・式部大輔兩人出題詩，式部大輔出因流汎酒，用之，申時許天氣晴，水邊立座，下土居，羽觴頻流，移唐家儀，衆感懷，入夜昇上，右衛門・左衛門督・源中納言・新中納言・勘解由長官・左大弁・式部大輔・源三位・殿上地下文人廿二人<sup>35</sup>

土御門第の東の対の南唐廂に公卿と殿上人の座，南廊の下に文人の座が設けられた。辰の頃から大雨となり，水辺近くに設けられた廊下の座には雨が吹き込むため，東の対に座を設けた。公卿，続いて文人が到着して詩の題が出され，詩作に入った。まもなくして晴れたので，水辺に座を移した。觴がしきりに流れた。殿上，地下，文人二十二人が集まり楽しい宴となって，多くの詩が詠まれた。講詩は翌日にまで及んだという内容である。

この曲水の宴で作られた詩が，大江匡衡の「三月三日寛弘四年，陪左相府曲水宴，同賦因流汎酒」と題する作である。その詩の前半を引く。

夫曲水本源，其來尚矣。昔成王之叔父周公旦，卜洛陽而濫觴，今聖主之親舅左丞相藤原道長，亦宅洛陽而宴飲。蓋乘輔佐之餘暇，惜物色之可賞也。於是，卿士大夫，仙郎儒史之工詩，天下一物已上。連賓榻於林頭，盡整詞華之冠，汎羽觴於水上，頻酌芳草之酒。至彼獻酬之淺深任波心，來處之遲速經岸腳。醉鄉國之俗，伴鄭泉而得水路。酒德頌之文，因巴字而添風情者也。於戲，何處不玩今日之華水，而居槐庭遊桃源者猶稀<sup>36</sup>。

曲水の起源は古く，周公旦が洛邑に都を定めて杯を流したことから始まるが，今は春色を賞して左大臣邸で行われることになった。公卿・士大夫・儒史で詩に巧みなもの，天下に一芸以上に通じたものが集まり，椅子を林辺に連ね，冠を整え，杯を流れに流して，詩を作り，献酬をしている。今日はどの地でも花水を玩ぶが，大臣の位でこの桃源郷に遊ぶのは稀であると詠んだものである<sup>37</sup>。

『今鏡』「波の上の杯」には，藤原道長の古例に倣って，藤原師実が曲水の宴を行ったことが記されている。

三月三日，曲水宴といふことは，六条殿にてこの殿せさせ給ふと聞え侍りき。唐人の水際に並み居て，鸚鵡の杯うかべて，桃の花の宴とてすることを，東三条にて，御堂の大臣せさせ給ひき。その古き跡を尋ねさせ給ふなるべし<sup>38</sup>。

曲水の宴は、桃花の宴とも言われていたことが分かる。

#### 四、桃の節句の成立

上巳の行事がもともと水辺での祓禊にあり、日本に伝わると、神道の古くからの修祓儀礼と結びついていったであろうことは、『源氏物語』「須磨」巻の記事から推測される。

やよひのついたちに出で来たる巳の日、「今日なむ、かくおぼすことある人は、御禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出で給ふ。いとおろそかに、軟障許を引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓へせさせ給。舟にことごとしき人形のせて流すを見給ふに、よそへられて、知らざりし大海の原に流れきてひとかたにやはものはかなしきとてみ給へる御さま、さる晴れに出でて、言ふよしなく見え給ふ<sup>39</sup>。

四辻善成の『河海抄』は、この一節を注して、前引の『漢書』「礼志」・『続齊諧記』・『文選』「南都賦」・王羲之「蘭亭序」を引くとともに、「世風記云三月上巳桃花水之時飲食為哺大飲食也歩胡反招魂請魄払除不祥<sup>40</sup>」と、逸書の『世風記』を引いて、上巳が招魂と払除のための行事であったと記している。「明石」巻では、光源氏を救うため桐壺院の霊が現われるが、その伏線となるのがこの上巳の祓であったろう。

『源氏物語』には雛遊が描かれている。上巳の人形と雛遊びが溶けあって江戸時代、雛人形が成立していく<sup>41</sup>。

三尺の御厨子一よろひに、品じなしつらひすへて、又小さき屋ども作り集めてたてまつり給へるを、所せきまで遊びひろげたまへり。「雛やらふとて、いぬきがこれをこぼち侍りにければ、つくろひ侍るぞ」とて、いと大事とおぼいたり<sup>42</sup>。

正月元日、小朝拝に光源氏が参内する際に部屋をのぞくと、紫上が雛遊に熱中していたという描写である。玉上琢彌は次のように記している。

昨日、大晦日のお遊びは早速「鬼やらひ」であった。そのためお遊びのお道具もこわれたのであろう。今日は男君の参内の遊び。雛に物をいわせ、車にのせ、日常見たり聞いたりすることを雛におさせになる。これが後に固定して雛祭りとなった。雛祭りとして年中行事にくみ入れられた時は、かような貴族の生活が消滅してしまった時である。一年のうちに日を選び、その日だけ、今は忘れた昔の生活を、雛人形にしのおのである。そして、それも子供の遊びになる。大人は、もう、過去をしのぼうとしてもできなくなっているのだ<sup>43</sup>。

『枕草子』に、「三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の、今咲きはじむる、柳などをかしきこそ、さらなれ」（「ころは」段）、「三月三日、頭の弁の、柳かづらせさせ、桃の花をかざしにささせ、桜、腰にさしなどしてありかせたまひし」（「上にさぶらふ御猫は」の段）とあり、三月三日が桃の季節であることを印象づけている。初期の花道伝書である『仙伝抄』にも、

五節・句の花の事。三月三日中ぞんのしんに柳をたつる。桃の花をそゆるなり。一色にてもくるしからず<sup>44</sup>。

とあり、三月三日の節句にふさわしい花として桃が見做されていたことが分かる。

『かげろふ日記』の天暦十年の記事に桃の酒のことが出てくる。藤原兼家が町の小路の女に通い出したことが発覚して直後のことである。

年かへりて三月ばかりにもなりぬ。桃の花などや取り設けたりけむ、待つに見えず。今一方も、例は立ち去らぬここに、今日ぞ見えぬ。さて、四日のつとめてぞ、皆見えたる。昨夜より待ち暮らしたるものども、「なほある

よりは] とて、こなたかなた取り出でたり。心ざしありし花を折りて、内の方よりあるを見れば、心ただにしもあらで、手習ひにしたり。

待つほどの昨日すぎにし花の枝は今日折ることぞかひなかりける

と書いて、「よしや憎きに」と思ひて、隠しつる気色を見て、奪ひ取りて返ししたり。

三千年を見つべきみには年ごとにすくにもあらぬ花と知らせむ

とあるを……<sup>45</sup>

節句というので桃の花などを準備して待っていたが、兼家は来ず、四日の日によやくやって来たので、道綱母は心をかき乱さる。その思いがふと口について出た歌に、三千年も続く長い愛情を私は持っているので、一日来なかったらとって気持ちに変わりはないと兼家が返したものである。「三千年を見つべきみ」には、西王母の三千年に一度実を付ける仙桃の故事が踏まえられている。

『漢武故事』については前述した通りである。道綱母の歌の「すぎにし」には、「過ぎ」と「飲(す)き」が掛けられている。桃の花を浮かべた酒を飲む習慣があったことが分る。桃花の酒については、一条兼冬の『世諺問答』にその起源についての説が載せられている。

三月三日に桃花の酒のみ侍るは何のいはれぞや。

答。人の國のことにや。太康年中に山民建山自然武陵といふ所にいたりて。桃花水にながれしをのみしより氣力さかなりしかば。いのち三百餘歳にをよべり。されば今の世に桃花をもちひ侍るとかや。酒をのむ事は、周の曲水の宴に盃をながせしよりや初りけん<sup>46</sup>。

武陵桃源の故事を踏まえるとともに、桃の力にあやかって「桃花水」を飲めば三百余歳の長寿を得ることができるとする。桃源郷という言葉の謂われともなった陶淵明の「桃花源詩并記」に描く理想郷は次のとおりである。

晉太元中、武陵人捕魚爲業。緣溪行，忘路之遠近。忽逢桃花林，夾岸數百步，中無雜樹，芳華鮮美，落英繽紛。漁人甚異之，復前行，欲窮其林。林盡水源，便得一山。山有小口，髣髴若有光。便捨船從口入。初極狹，纔通人。復行數十步，豁然開朗。土地平曠，屋舍儼然，有良田，美池，桑竹之屬，阡陌交通，雞犬相聞。其中往來種作，男女衣著，悉如外人。黃髮垂髻，並怡然自樂。見漁人乃大驚，問所從來。具答之。便要還家，爲設酒殺雞作食。村中聞有此人，咸來問訊。自云先世避秦時亂，率妻子邑人來此絕絕境，不復出焉，遂與外人間隔。問今是何世，乃不知有漢，無論魏晉<sup>47</sup>。

陶淵明は、地上の樂園である極上の美的空間を以上のように表現している。桃の花が咲き誇る林である別世界の入口に漁師が、迷い込んだ様子が描かれている。桃の木が満開に鮮やかに咲き、花火が舞い散る情景の美しさの幻想的な雰囲気を描くことにより、現実世界とは異なる平和で幸福に満ちた理想郷としての桃源郷へと導いている。

桃の節句が、雛祭りとして成立していくのは江戸時代であることは前述したとおりである。村瀬栲亭の考証随筆『枕苑日涉』(文化四(1807)年刊)には、三月三日が女兒を祝う行事となったことについて、以下のとおり述べている。

是日家有女兒。必陳人勝供艾赤豆飯。置酒飯膳謂之雛會。因以上上巳爲女兒節。按國語謂人勝爲雛。是日兒女陳人勝遊戲。謂之雛遊。古昔以正月爲此戲。舊事記曰。敏達天皇二年正月。侍從進雛像。源氏物語。亦有元日雛遊之語。三日雛遊未詳起于何時也。近世衣之以繡績。飾之以金珠。一對價或至五六十金。比者嚴禁其妖靡者。雖頗歸質。要非復古制也。蓋漢人以人日及立春爲彩勝。三日則有鏤人。漢人以五日。爲女兒節。在此方以三日爲女兒節。五日爲男兒節。四方雖俗殊人情之不相遠。可以觀已<sup>48</sup>。

正月初七日(人日)に用いた人形飾りである「人勝」の風俗が前述の『源氏物語』の雛遊びに投影

されていると指摘するとともに、三月三日の雛遊びが近頃の風俗で華美に流されやすかったことを述べている。

## おわりに

本論文では、先ず桃が古代から辟邪の効能とともに生命力や吉祥の象徴として喜ばれた果樹であることを主に中国の文献から論証した。次に中国で上巳節から始まる三月三日の諸行事について概観した。そして、藤原道長の土御門第で行われた曲水宴を中心に、中国伝来の行事の日本での受容を検討した。最後に女兒の成長を祝う桃の節句の成立について諸資料をもとに後付けた。

結論として、上巳の祓禊と神道の祓が融合しながら、雛祭りへと変化していったなど、中国文化の日本での受容とその変容についてまとめとした。

\* 本論文は、平成二十八年五月七日日本大学法学部にて開催された「国際文化表現学会」での「桃の呪性と生命一日中比較の視点から」と同年五月十七日同済大学にて開催された「中国日語教学研究会上海分会」での「日中における桃源郷思想の受容と歴史的展開」の口頭発表初出を基にしている。

## 参考文献（発行年月順）

- 中村喬「桃梗から春聯へ」『続中国の年中行事』平凡社、1990年3月
- 中野美代子「桃源郷をめぐる風水一境界としての幻想空間」『奇景の図像学』角川春樹事務所、1996年3月
- 井波律子「桃源郷の理想郷—桃源と仙界」『中国文学—読書の快楽』角川書店、1997年
- 王秀文『桃の民俗誌』朋友書店、2003年6月
- 中村裕一「桃板・桃符」『中国古代の年中行事 第一冊 春』汲古書院、2009年11月
- 川合康三『桃源郷中国の楽園思想』講談社、2013年9月

- 1 佐竹昭広・山田英雄他校注『万葉集（五）』岩波文庫、2015年3月、106・132頁
- 2 山口佳紀・神野志隆光校注訳『古事記』（新編日本古典文学全集1）小学館、1997年6月、47頁
- 3 中国最古の詩歌集である。風・雅・頌の三部に分かれる。『詩経』は、毛亨・毛萇が伝えたことから『毛詩』とも呼ぶこともある。
- 4 加納喜光『詩経・I 恋愛詩と動植物のシンボルズム』汲古書院、2006年3月、171頁
- 5 『毛詩』「周南」（足利學校遺蹟圖書館後援會刊『毛詩注疏 第一巻』汲古書院、1973年11月、111～112頁）
- 6 刘衡如校点『本草綱目 下冊』人民卫生出版社、1982年11月、1741～1742頁
- 7 王充『論衡』「訂鬼第六十五」（黄暉撰『論衡校釋』中華書局、1990年2月、938～940頁）
- 8 賈思勰『齊民要術』江蘇廣陵古籍印刻社、1998年12月、129頁
- 9 寺島良安『和漢三才圖繪下』東京美術、1970年3月、1221頁
- 10 魯迅輯録『魯迅輯録古籍叢編』人民文學出版社、1999年7月、435～436頁
- 11 伊藤伊兵衛が元禄八（1695）年に出版した江戸を代表する総合的な園芸書。
- 12 加藤要校注『花壇地錦抄・草花絵前集』平凡社、1976年4月、67頁
- 13 王利器校注『風俗通義校注』中華書局、1981年1月、367頁
- 14 王毓榮『荆楚歲時記校注』文津出版社、1988年8月、23～24頁
- 15 『支那民族誌第一巻』支那民族誌刊行會、1940年3月、274・412～413頁
- 16 蔡邕『獨斷』（周光培編『歷代筆記小説集成 漢魏筆記小説 全一冊』河北教育出版社、1994年4月、481～482頁）
- 17 南朝梁の昭明太子編纂の全三十巻の詩文集である。周から梁までの文学者一三一名の作品を賦・詩・論など三七の部類に分類し収録している。
- 18 李培南、李學穎等標點『文選』上海古籍出版社、1986年6月、123頁
- 19 和銅五（712）年に太安万侶が編纂し、元明天皇に献上された現存最古の歴史書である。
- 20 京都史蹟會編『林羅山文集 下巻』ペリカン社、1979年9月、879頁
- 21 渡邊義浩他編『全譯後漢書 第四冊 志（二）』汲古書院、2002年10月、94頁
- 22 中華書局編輯部点校『宋書』中華書局、1974年10月、386頁
- 23 王靖憲主編『中國書法 第2巻 魏晉南北朝』文物出版社、2009年8月、「圖版説明」、25頁
- 24 西晋の長安の学者であり、文学にも秀でていた。武帝により太子舍人に任命された。
- 25 西晋の学者、文学家であり、博学多聞と評されている。

- 
- 26 楊伯峻・吳翊如等点校『晉書』中華書局，1974年11月，1433頁
- 27 李培南・李学穎等標点『文選』中華書局，1968年6月，964頁
- 28 『群書類従第六輯 律令部公事部』（訂正三版）続群書類従完成会，1960年7月，502頁
- 29 青木和夫・稲岡耕二他校注『続日本紀二』（新日本古典文学大系13）1990年9月，190頁
- 30 小島憲之・直木孝次郎他校注『日本書紀②』（新編日本古典文学全集3）1996年10月，245頁
- 31 王毓榮『荆楚歳時記校注』文津出版社，1988年8月，126頁
- 32 傅東華・西北大学歴史系標点『漢書』中華書局，1962年6月，1689～1690頁
- 33 仇兆鰲注『杜詩詳注』中華書局，1979年10月，1950頁
- 34 故實叢書編集部編『編故實叢書6 西宮記第一』明治図書，1952年10月，85頁
- 35 東京大学史料編纂所編『御堂閔白日記上』岩波書店，1952年3月，213頁
- 36 大曾根章介・金原理校注『本朝文粹』（新日本古典文学大系27）岩波書店，1992年5月，262頁
- 37 柿村重松『本朝文粹註釋下冊』内外出版会社，1922年4月，122～127頁を参照した。
- 38 竹鼻績訳註『今鏡（中）』講談社学術文庫，1984年6月，150～151頁
- 39 柳井滋・室伏信助他校注『源氏物語 二』（新日本古典文学大系20）岩波書店，1994年1月，44頁
- 40 玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』角川書店，1968年6月，319頁
- 41 是澤博昭『子供を祝う 端午の節句と雛祭』淡交社，2015年4月参照
- 42 柳井滋・室伏信助他校注『源氏物語 一』（新日本古典文学大系19）岩波書店，1993年1月，247頁
- 43 玉上琢彌『源氏物語評釈第二卷 若葉集』角川書店，1965年1月，271頁
- 44 華道沿革研究会編『花道古書集成第一巻』思文閣出版，1930年11月，27頁
- 45 川口裕子訳註『蜻蛉日記I』角川文庫，2003年10月，30～31頁
- 46 『群書類従 第二十八輯 雑部』（訂正三版）1959年7月，673頁
- 47 袁行霈『陶淵明集箋注』中華書局，2003年4月，479～480頁
- 48 村瀬栲亭『秋苑日涉 六』十九ウ～二〇オ